

お目出たき人

——高齡者文学人生論

武者小路実篤 (1885-1976)

『お目出たき人』 (1919) 「白樺」

『幸福者』 (1920) 「叢文閣」

『愛と死』 (1939) 「日本評論」

『武者小路実篤詩集』 荒川洋次編 「角川書店」

自分は女に饑(う)えている(二十六歳)
私は人間を愛する(八十五歳)

武者小路実篤が二十六歳のときに発表した出世作『お目出たき人』には、この作者、大丈夫かなと読者を心配させそうな箇所がある。

自分は女に饑(う)えている。

誠に自分は女に饑えている。残念ながら美しい女、若い女に飢えている。七年前に自分の十九歳の時恋していた月子さんが故郷(くに)に帰った以後、若い美しい女と話した事すらない自分は、女に饑えている。

なにも心配することはなかった。作者は結婚して、二人の娘と七人の孫にめぐまれ、好きなように絵を描き、詩をつくり、幸せな八十代をすごした。「人間を愛する」という詩を読んでみよう。

私はもうじき

満八十五歳になる

よくも生きていたと思う

生きていることは嬉しいものだ

死ぬ事はいやなものだ

だが僕は完全に死ぬことを忘れている

いつまでも生きる気になっている

馬鹿なのか

ありがたいのか (中略)



お目出たき人

高齢者文学人生論

だが私は益々人間を愛する
だが人間は利口なのか
馬鹿なのか私は知らない
人間を愛しているのは
事実らしい
人間は愛するだけの
値いあるものと私は思う
人間を愛する
私は人間を愛する

この詩の作者は利口か馬鹿か。単純素朴な内容で、ことばの繰り返しが多いところは、もうろくしているようでもあるが、人を愛し、自分も幸せだと信じている作者が馬鹿だと笑う読者がいるとすれば、たぶん読者のほうが馬鹿だろう。

こんな風に「人間を愛する」と素直に言える日本人の高齢者は少ないと思う。私も「愛する」などという言葉は口に出しては言えない。

その点、武者小路実篤は何の抵抗もなく「愛する」という言葉が使えた。「女に饑えている」と「人間を愛する」とを比較すると、お目出たき人はあきらかに年をとって利口になっている。

九十代になるとさすがに楽天主義は続かない。安子夫人が亡くなると、その後を追うようにして死んだが、それでも『幸福者』かもしれない。

仲良きことは美しき哉

武者小路実篤